

---

# 雪時計

るーぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪時計

### 【著者名】

Z8891S

### 【作者名】

るーふ

### 【あらすじ】

余命一年の少女。

命の最期の願いは『世界を見てみたい』  
雪の降る季節にはじまった少女の旅。

多くの人と出会い、そして別れ。  
そして、少女は最後に 。

## プロローグ

世界はお金がある者に有利だ。

お金さえあれば、なんでも買える。

なんでも買える、つてことは幸せのことだ。

極端な話、命だって、気持ちだって買えてしまつ。

買えないモノがあるとしたらそれは、

時間ぐらいだらう。

季節は冬。

人々は恋人と街を歩き、雪が人々を祝福していた。

「あのね」

街外れの大きな屋敷。

その中の一部屋には艶のある黒髪と雪のように真っ白な肌の少女。真っ白なレースとフリルがついたワンピースを着ている。

そして、隅の方にはボロボロの汚い服を着た少年が座っていた。  
彼女は暖かい部屋の中で窓越しに外を見ていた。

「私、死ぬんだ」

少女は悲しくも嬉しくもない様だった。  
その言葉は、明日の天気ぐらいの意味しか持つてなかつた。  
少年はその言葉に反応を示さない。  
それは、『どうでもいい』、と言つよりは『知つていい』と言つ  
様な様子だ。

「もう、次の雪は見られないのかな……」  
少女は窓の外を見て呟く。  
雪はただ静かに降つていた。

## プロローグ（後書き）

オリジナルキャラ、バンバン出ますよー！

## 第一話

雪の国。

一年中寒く、夏の僅かな間以外は雪が降るその国を人々はそう呼んだ。

そして、今は雪の国で縁が見られる短い夏。

雪の国の中でも特に夏が短い街の外れに大きな屋敷があった。そこにはいつも一人のお嬢様だけが残されて暮らしていた。

「ねー、ヴェガー？」

一人の少女が椅子に座つて足をぶらぶらさせている。  
大きな黒い目に白い肌。まさに美少女だった。  
その不満そうな表情が無ければだが。

「はい、何でしょうか」

テーブルの向かい側には銀髪の青年。  
いかにも真面目そうでスーツにはシワ一つなかつた。  
彼はにっこり微笑んで、少女を見ていた。

「もう飽きたよお、いつまでやるの？」

少女の前にはたくさん数字の書かれたノートが置いてあった。  
どうやら、簡単な計算問題のドリルらしい。

「いつまでもですよ、お嬢様。貴女のご両親の命令ですから」「でもお……」

少女は泣きそうな、すがり付く様な目でヴェガを見つめる。  
ヴェガはやれやれ、と胸元から小さなノートを取り出しづらりとめくる。

少女は期待の眼差しで見ている。

「……では、ダンスレッスンに」「ヴェガ、遊ぼうよ」

ヴェガの言葉を遮つて少女は言った。

「ね、ちょっとだけ出かけよう」

「駄目です」

ヴェガはすぐにきつぱりと言つた。

少女は不満そうにふくれた。

「ヴェガのけーち、ばーか」

「ケチでも馬鹿でも結構です。では続きを」

ヴェガはノートを胸元にしまいながら言つた。

その瞬間、ヴェガの視界が遮られた。

ガタガタ、と椅子が揺れる音がほぼ同時にする。

どうやら自分にぶつけられたのは計算問題の書かれたノートだと認識するのと、少女が椅子から消えているのを見たのは同時だった。

「今日も逃げらたんか、ヴェガはん」

「……今日もいたんだね。メイドさん」

ヴェガがそう言つと上から金髪の少女が降ってきた。

年齢は先程の少女より少し上、といったぐらいだろう。

「まったく、あんたはアホやな～。シヨーラが靴脱がせたぐらいでいると思うとつたんか？」

ヴェガは何も言い返せない。

シヨーラはいつも勉強の時間になると逃げ出すから、今日は靴を脱がせておいた。

もちろん、最初から効果があるとは思つてはいなかつたが。

「で、シヨーラは毎日どこへいつとんや？」

メイドが聞くと、ヴェガは言いたくなさそうな表情をする。

そして、無言のまま外を指さす。

メイドはその指の先を追う。そこは街の中心部から離れたところを指していた。

「あそこは……」

「街裏ですね。」つてメイドさんは知つてますね

「あっかーん！ あんなとこに行つてはあかん！ ヴェガはん、うち、ちよつと行つてくるわ」

メイドは袖をまくり、髪を縛る。

彼女は長い髪は好きだが、こいつは邪魔になる、とよく言つてゐる。

「じゃ、ヴェガはん。あとでな」

メイドはそう言つと、窓を乗り越え飛び降りた。

街まで、歩きで30分かかる道を彼女が走るのが部屋から見えた。静かになつたいつものヴェガの部屋で彼は呟く。

「ニニ……一階ですよ」

メイドの飛び出でた窓から、夏の匂いのする風が吹いていた。

## 第一話（後書き）

読んで、想像つくと思いますがプロローグより昔の話です。  
まだ、元気だったころ、ですかね。

## 第一話

その頃ショーラは、荷馬車に揺られていた。

「おじさん、いつもありがと」

子供の足で歩いていては着く前に捕まってしまうので、ショーラが街に行くときは近くを通りた荷馬車に乗せてもらひりのだ。

「いや、いいんだよショーラちゃん」

街の近くに住む者はショーラをお嬢様、と呼ばない。

と、言うよりショーラがそう呼ばれるのを嫌うため、ほかの子供と同じよう接している。

ショーラは仰向けに寝転がる。空には白い雲が浮いていた。

「ねー、おじさん

「ん、なんだい？」

男は振り返りずに答える。ショーラも相変わらず、上を向いたままだつた。

「もうすぐ、私ねーフオになるんだよー」

皿麩げにショーラは言つ。

「ああ、さうか……あの、小さくてよく脱走ばかり は今もだな

「脱走じゃないもん！ お出かけだもん！」

ショーラは起き上がりつて反論する。男は楽しそうに笑つている。むー、とショーラは膨れる。しかし、すぐ笑顔へと変わった。

「街だ……！」

ショーラは荷馬車を飛び降りる。

「ありがとー おじさんー！」

そして、細い道を走つていった。

細い道はだんだん暗く汚くなつていぐ。

ショーラの庶民では手を出せない様な金額の服は黒く、臭くなる。しかし、ショーラは気にせず進む。すると、道が終わり、少し広い空間に出た。

もちろん、屋外で天井が無いのでさっきまでの道より明るい。

「クロ一、クロクロクロー」

ショーラは何度も呼ぶ。

すると、上から少年が降ってきた。

年はショーラと同じぐらいだが、身にまとっている服はボロボロ、髪はぼさぼさだった。

ショーラはその少年を見つけると、嬉しそうな顔をする。

「クロツ！」

少年はショーラに早足で近付き、ポロン、と一発殴った。お嬢様である彼女に手を出せる子供は彼ぐらいだろう。

と言うより、彼以外誰も殴らない。

「いたあ……」

「俺は、クロスだ！ ク・ロ・スつ！ 猫みたいに呼ぶんじゃねえ！」

クロスはふん、と鼻を鳴らす。

クロスはこのあたりのガキ大将みたいなものらしい。

ショーラはクロスの目の前に両手を出す。

そこには小さな紙鼓がたくさん乗っていた。

「……何だ、これ？」

「キャンディ！ おいしいよ」

ショーラは包み紙を開けて、クロスの口の前に持っていく。

ショーラの笑顔があまりに無邪気なので、仕方なくクロスは口を開ける。

「甘い……な」

「ね、おいしいでしょ！」

ショーラはクロスに喜んでもらい満面の笑み。

クロスの顔は見る見るうちに赤くなる。ショーラは不思議そうに

クロスの顔を眺めている。

クロスは沈黙が気まずくなり叫ぶ。

「こんなもんでも、腹いっぱいになるかあ！」

「じゃ、明日来て。私とクロスの誕生日だから

「はあっ！？」

「じゃ、絶対だからねっ！」

「おじちよつ」

行くとはだれも言っていないのだが、シーラは手を振り、元来た道を走つていった

## 第三話（前書き）

サブタイトル、つけるなら  
『誕生会前編』でどうかね……。

「……」

きらびやかな空間にクロスは場違いだ、と思う。後悔とは字の通り後から悔む。今まさにそれだ。

「クロッ！ 来てくれたんだね！」

ショーラがパタパタと走ってきてクロスに飛びつく。

そう、今日はショーラの「オの誕生日。

ショーラはいつもよりさらに高価そうな服を着てご機嫌だ。クロスは溜息をつく。自分の服装があまりにもみすぼらしい、からではない。

ショーラの後ろにリリーの姿があつたからだ。

「おークロス、あんた来たんか？」

表情はにこやかだつたがリリーからは殺氣が出ている。一回会つただけでお互いに合わない事が分かつている。好きではない、ではなく嫌い。

実はクロスはこの前リリーにも会い、『絶対に来るな』と言われていた。

なのでクロスはなるべくリリーとは田舎を合わせないようにする。

「クロー、こっちだよー早く来て！」

ショーラは少し離れたところでクロスを呼ぶ。

「はよ行き、うちよりも厳しい人が向こうに居るから」

リリーはクロスが中に入ることを仕方なく認めたらしい。

こう言われてしまうとクロスも帰るわけにはいかない。クロスとしては、ここで追い返されてしまつても良かったのだが。クロスは仕方なくショーラがいる方へ歩いて行つた。

「クロはここに座つて！」

ショーラは自分の右隣のイスを叩く。クロスはショーラの言つがままにする。

ショーラの左隣にはステッスを着た若い男性が座つている。クロスの推測では兄ではないかと。まさか、父親なわけは……ないな。

で、多分こいつがリリーの言つていた『厳しい人』なのだろう。「初めまして、クロス。私はお嬢様の家庭教師のヴェガと申します」ヴェガはそう言いクロスに頭を下げる。

クロスは何も言わずに軽く頭を下げた。

「では、本日のお嬢様誕生記念会を始めましょうか」

ヴェガはベルをチリリと鳴らす。

「え、ちょっと待てよ… お前、親は？ サつきのメイドは？ 仲、良いんだろ？」

クロスの問いかけにショーラは首を振る。

そして、ヴェガがショーラの代わりに答えた。

「お嬢様のご両親は忙しい身ですので、私がお嬢様の全ての面倒を見ております。メイド、リリーのことですね。確かにリリーはお嬢様と仲がよろしいですが、メイドですので参加はできません」

ヴェガはつっこりと微笑んで言つた。ショーラは少しだけ悲しげな表情をする。

「シェー」

クロスが話しかけようとすると、目の前の料理が置かれる。

ショーラはその途端笑顔になつた。

「では、一度食事にしましようか」

ヴェガがそう言つたので、クロスはショーラに何も言えなかつた。

## 第四話

「何故、お嬢様はクロスを招いたのです？」

食事もほとんど終わり、あとはデザートだけとなつたころ、ヴェガが口を開いた。

ショーラはうーん、とうなり声をあげて悩んでいる。  
そこでヴェガが続ける。

「お嬢様には由緒正しき家柄の婚約者がいるのですからこのような軽率なまねは」

「じゃ、私クロと結婚する。クロのこと大好きだもん」  
ショーラはにっこり笑つてそう言つた。

ヴェガは勿論だつたがクロスも言葉が出ない。

「だから、クロと結婚するよ」

「バ、バツカじゃねえの！」

笑顔で話すショーラにクロスは立ち上がり叫んだ。  
ショーラはきょとんとした顔でクロスを見ている。

「えー、私とクロは『こいびと』じゃないの？」

一体何をどうすればそつなるのかクロスには理解できない。

ショーラとは同じぐらいの年齢だが、ショーラの思考はめちゃくちゃだ。

「違うにきまつてるだろつ！」

「じゃあ……何？」

「友達だ、友達」

友達かあ……、とショーラは呟く。

しばらくショーラは無言でいたが、笑顔でクロスの方を向く。

「うん！ 私とクロは一生友達だよつ！」

ショーラの笑顔がクロスの胸に突き刺さつた。

なぜか、彼女の笑顔がさびしそうに見えたから。

「ねー、クロス？ 本当に帰るの？」

誕生日パーティが終わり、クロスは外へ出る。

もう、夕方なのでシェーラは外出させてもらえない。

「当たり前だろ」

「ここに住まないの？」

シェーラはさびしそうに言うが、クロスは騙されない。

「ああ、住まない。さびしいなら婚約者でも呼べばいいだろ」

「…………」

シェーラはむうつ、としてみせる。クロスはシェーラを抱きしめようとした。

が、止めておいた。

「では、クロスは私が送りますので」

ヴェガが現れ、シェーラの頭をポンポンとなでた。

「じゃ、またね。クロ」

シェーラはそう言い中へ入つていった。

その瞬間、ヴェガから殺氣を感じた。シェーラへのではない、もちろんクロスへ向けたものだ。

「……やっぱり俺が嫌いなんだな」

「いえ」

ヴェガはクロスと目を合わせようとはしない。

真っ直ぐ前を向いたまま答えた。

「まあ、好きか嫌いか、と問われますと嫌いですが。……出来るだけ、お嬢様に関わらないで欲しいだけです」

はつきりと拒絶された様な気がする、とクロスは思つた。

クロスが何も言わずにいると、ヴェガが口を開く。

「お嬢様には私が許可するまで会わないでください。もちろん、ここにも来てはいけません」

クロスは黙つてうなづく。

元々、関わるはずのない一人だからこうすることが互いの人生に  
とつて最善だということ。

ショーラは婚約者と結婚し、幸せな家庭を築くこと。クロスはあの街裏で毎日生きるために汚い道を進むこと。それが定められていた道なのだから。

「分かつて、俺の住む世界はここじゃないな……」

「いえ、それはあなた自身が決められることです」

予想外の言葉がヴェガの口から出た。

ヴェガはクロスの方を向き、微笑む。

「貴方がお嬢様にふさわしい人間になればいいんですよ」

それは無理だ。

クロスは口には出さなかつたがすぐにそう思った。

なぜなら、もう俺達は会うべきではない。会えないのだ、と。

## 第五話

それから、一人は再開することなくショーラはお嬢様らしく成長し、クロスも強く素早い少年になり、街裏では有名な存在となっていた。

最後に会ったショーラの誕生日から、八年がたとうとしていた。

「兄ちゃん、おなかすいたー」

小さな汚れた子供が一人の少年に群がる。少年は子供たちの中で最も背が高く最年長だった。

そう、彼こそがクロス。あの時とは比べ物にないぐらい強くなり、自分だけではなく他の捨て子まで育てている。街裏のリーダー的存在在だった。

「分かつた、分かつたから少し離れろっ！」

街裏に今は大人がいない。数年前に大人達は『ショク』を与えられ、他の場所へ移つていった。残されたのは子供だけ。

クロスの育ての親もどこかへ行つてしまつた。

だからと言って、死ぬのが普通の世界で別れぐらいで悲しむほど脆くはない。

「兄ちゃん、ちや」

クロスの服代わりにしている布の端を2オグライの男の子が引つ張る。そして、もう片方の手で街裏と大通りをつなぐ唯一の通路を指さしていた。

そこには、真っ黒のフードを被つた『大人』がいた。

「誰だ、お前……」

クロスは子供たちを自分の後ろに置く。そして、腰のナイフに手を当てる。

体格差はかなりある。見たところ、相手は老人ではない。  
それに、かなりの実践を積んでいる様な気がする。野生のカン、  
という奴だ。

「クロス……ですね」

黒フードは一步ずつクロスに近づく。ゆっくりと静かに。  
クロスは、ナイフをフードの人間に向ける。

「おや……？ 迎えに来たのにその態度ですか、クロス」

黒フードは意味の分からぬ事を言う。

それが、作戦なのかもしれない。クロスは全神経を黒フードに集中させる。

ただ

それが間違いだと気づく時、彼は地面に押し付けられていた。  
どうやら、仲間がもう一人いたらしい。

「にいや  
」

誰かが叫んだような気がした。

しかし、クロスの耳には届かなかつた。

馬車が一定のリズムで揺れている。

ああ、俺は そうだ、あいつらは誰なんだ……？  
ぼんやりとクロスは考えていたが、急に起き上がつた。  
すると、そこには男と少女が座っていた。男の方は見たことがあつた。

「あ、起きたのですね。クロス」

「お前は……ヴェガ、か？」

しかし、それにしては若すぎる。八年前と何も変わらない。

「ええ、そうですよ」

「じゃ、何しに来た」

クロスは立派な人間にはなっていない。ふさわしいわけがないのだ。

ならば、どこに連れていかれるのか。何のために。

「貴方を迎えて来たのですよ」

「は……？」

ヴェガは微笑みを浮かべて続ける。

「貴方とお嬢様が会うのを許可します」

「なんでだよ。俺は、ふさわしいとは思えないぞ」「ええ、ふさわしくはありますんが貴方にはお嬢様に会つてもらいます」

「どうやら、俺に選択権は無いらしい。がんばれば、こいつぐらいなら振りきれるかもしねないが、実力が分からないのでやめておこう。まだ、死にたくはない。それに、メイドも一緒にいるし。

「で、あいつはもう結婚したのか?」

クロスは仰向けに寝そべつて聞く。

「いえ」

「じゃー俺なんかが行つたらまずいんじゃねえのかー?」

「お嬢様はもう、一生独り身です」

ヴェガは淡々と何度も繰り返した言葉のようになつた。  
そんなはずはない。確かに昔、こいつは言つたはずだ。  
「お嬢様は無誰にも求められませんよ。その血筋と財産があつたとしても」

クロスは鼻で笑つた。

「じゃ、なんだよ……。俺を婚約者にするつもりか……?」「いえ、貴方の様な肩で野蛮な人間、お嬢様が選んだとしても引き離しますよ」

散々な言われようだ。婚約者なわけ無いとは思つていたが、ここまで言われるとも思つていない。

しかし、このぐらいでクロスの心はおれなかつた。

「じゃ、何のために俺は連れて行かれるんだ」

「お嬢様がもう、意味のない存在になつてしまつたので自由にしてあげよ」と

そのあと、しばらく馬車に揺られ、見覚えのある屋敷が見えた。

「さあ、着きましたよクロス」

クロスは馬車から降りる。リリーがクロスの先を歩き、ヴェガが後ろを歩いた。

そして、ドアの前まで行くとリリーがドアを開けた。

「どうぞ、お入りください。クロス」

昔のようなしゃべり方ではなく、標準語でリリーは言った。

クロスは軽く頷き中へ入る。

「ほんとに変わっていないんだな……」

「ええ、変わるのは生き物だけですよ」

ヴェガがドアを閉めながら言つ。

「こちらです」

ヴェガが案内するのは一階の部屋だった。

クロスは行ったことのない場所。ヴェガの後ろをついていく。

そして、他の扉とは見分けがつかないがどうやらここがショーラの部屋らしい。

「入つて……いいのか？」

「ええ、もう貴方達はただのショーラとクロス、という関係ですか  
ら規制する理由がありません」

クロスはゆっくり扉を押した。

再び、彼らは出会い物語は始まる……。

## 第七話

「誰……？」

声が聞こえ、クロスは立ち止まる。

部屋の奥から真っ白なワンピースを着た少女が現れたからだ。少女は一瞬驚いたようだったが、微笑んだ。

「クロス……でしょ？ 私、分かるよ」

「ショーラ……」

彼女は病的に白かった。肌はあるで雪のようだった……なんて、安直な表現だろうか。

「やつぱりクロだよね、会いたかった」

ショーラはクロスを抱きしめる。クロスはそっと、ショーラの身体に触れる。

15才の少女、とは思えないぐらい細い体。

「お前……本当にショーラか？」

クロスは思わず問いかける。

昔はもつと元気で、健康体だった……様な気がする。

ショーラはきょとんとしている。そして、くすくす笑い始めた。

「何言つてるの？ 変なクロ」

「だつて……」

「お嬢様、少々良いですか？」

ヴェガが中に入ってくる。ショーラは少し不満げに頷いた。

「では、クロス。こちらへ」

クロスはヴェガの後についていき、部屋を出た。

どこまで行くのだね、と思つてはいるが、ヴェガはすぐ隣の部屋に入る。

クロスが中に入ると、ドアは閉じられ後ろで鍵がかけられる。

「で、何なんだよ。あいつは……なんであんな……」

「お嬢様は病氣です。故に婚約者達は去りました」

ヴェガは無表情で言つ。

だからか。もう、永遠にシェーラは結婚できないから、会えた。

「なので、お願ひがあります」

ヴェガはクロスに頭を下げた。

「お嬢様と……一緒にいてください」

「それは……」

やつぱり結婚しろ、ってことなのか？

そりや、昔は好きだつて言われたけど……。

「一緒にいるだけですよ。友達です」

ヴェガは頭を上げて、クロスに言つ。

あくまで、身分の低い俺と婚約させるわけにはいかない、友達、か。

だが、クロスにだつて仲間を養わなければいけない。そういう義務がある。

どちらを選ぶか。

「ああ、分かつた」

「俺はここにいるよ」

クロスは仲間を捨てた。

たつた一人の心を救う、それだけのために。

彼は、もう一度彼女に笑つてほしかった。

明るい太陽の様に。

「では、クロスはこちらの部屋を使つてください」

クロスは頷いた。

## 第八話

「クロ、ほんとここに住むのー?」

「あ、ああ……」

クロスが頷くと、ショーラは嬉しそうに笑った。

こうしていると、病気だなんて嘘のようだ。

「じゃ、毎日一緒にね。私、外に出れないから……ずっと、クロに会いたかったんだよ」

「え……」

外に出れない?

クロスはおそらく驚いた顔をしていたのだろう。ショーラはうん、と頷く。

「私ね、病気なんだって。だんだん身体が動かなくなつて、死んじやうんだって」

ショーラはゆっくり立ち上がる。

その顔は少し悲しげだった。

「…………」

「でも!」

ショーラはクロスを真っ直ぐ見つめる。

「クロに会えたから嬉しいよ。ヴェガは私が結婚したら、クロスに会わせないつもりだったのよ」

ショーラは笑っている。

ショーラが笑っている。

クロスは彼女の笑顔を目に焼き付けていた。

「……って、クロ? 聞いてる?..」

「あ、ああ。聞いてる」

「……じゃ、なんて言った」

「俺に会えてうれしいんだろ?..」

「違うつ、そのあと!..」

そのあとは聞いてなかつた。と言つたか、何か言つてたか？

クロスは思いだそうとするが、ショーラの笑顔だけしか思い出せない。

……つて、何を考えているんだ、俺は。

そう思い、田の前を見ると、ショーラは明らかにむつとしている。

「も、いい。クロの馬鹿」

ショーラはそういう言ひ方を向く。

「わ、悪かつたよ……」

一応謝つては見るがショーラは反応を示さない。

しかし、明らかにクロスをチラ見している。

「じゃ……」

ショーラが顔を少し赤くしながら言つ。

少し口を開きかけ、一度閉じる。

そして、クロスの方を向きほほ笑んだ。

「今、街で一番おいしいお菓子、買つてきて」

「……は？」

「いいから、早く！」

ショーラにせかされクロスは部屋を出た。

部屋を出るときにショーラは小さな財布をクロスに押しつける。

おそらく、彼女の自由にできるお金の一部だらう。

そう思つているとドアは閉まり、鍵のかかる音がした。

「なんだつたんだ……？」

クロスはそう呟きながらも一番おいしいお菓子は何かを考えていた。

「お嬢様、どうして止めたのです？」

くすくす、と笑いながらヴェガが聞く。

ヴェガは当たり前のようになんかのベッドの上に座つていた。いつの間にか、ヴェガもリリーと同じく神出鬼没出来るようにな

つていた。

「何を……」

「分かっていますよ？あの時、キス、やせようとしましたね」  
いつたいどこから何を見ていたのだろう。

ヴェガはショーラを壁際に追い詰め、見下ろす。

「お嬢様はもう、結婚できない身となつたのですからあそこでクロスとキスしようが、

お嬢様の身が穢れようが私は止めませんでしたよ」

「だつて……」

ショーラはクロスを見上げる。

「クロスに嫌われたくないから」

クロスに会えた、それだけで幸せ。

その代償が結婚だとしても。私はクロスに会つことの方が幸せ。

「そうですか……」

「うん」

「なら、クロスと結婚すればいいのでは？結婚出来て、クロスとも一緒にいれますよ」

ショーラは耳まで赤くなる。

そんなに自分の思考は読まれやすいのか、と。

しかし、ヴェガはショーラを見ながら面白そうに笑うだけだった。

「な、なんで！？ そんにや……そんなこと言つてないじゃん！」

「そうですね。では、私はこの辺で」

そう言い、ヴェガは微笑んで部屋を出ていった。

ショーラは顔の熱りが治らず枕に顔をうずめていた。

## 第九話

「なんで、俺なんかに……」

一人でぶつぶつ言いながら、クロスは街の大通りを歩く。

普段なら絶対に来ない場所なので、いまいちよくわからない。

「あいつも、使用人に頼めばいいだろっ！」

大通りは人で溢れかえっている。

こんな場所はあまり好きではない。気配も音の感覚もつかみにく  
い。

「はあ……」

クロスは何度目かの溜息をつき、一つの店に入った。  
そこは街の中流家庭の少女たちに人気の店、だ。チビビモの一人  
が言っていた。

少なくとも、汚い裏街の男が一生入ることはなかつただろう。  
ガラスのドアを開けると甘つたるい匂いが鼻を突く。

そして、女の高く、耳をつく声。

クロスは、人をかき分けながら、商品をいくつか掘む。

普段ならこのまま外に出てしまうが、今日はそう言つ訳にはいか  
ない。

「おい……」

レジに商品を置く。おそらく、店員は薄汚い彼に恐れを抱いたこ  
とだろう。

一瞬の沈黙があつたが、店員は何事もないように振る舞う。  
しかし、彼女に笑顔はなく、指先が微かに震えていた。

クロスはそんな彼女になぜかいら立ち、ショーラから渡された金  
貨の入った袋を置く。

明らかに商品の代金より多い。女性が顔を上げると、クロスと目  
が合う。

クロスは無表情で女性の手から商品を奪い、無言で店を後にした。

「 つたく……」

街の奴らは、いつもああいう目で見る。

恐れと同情、そしてそこから生まれる安堵。

クロスはおそらくいらついていた。普段では、絶対に犯さないはずのミスを犯す。

人にぶつかったのだ。いや、正確にはぶつかられたのだが。ぶつかつたそれは激しく地面にたたきつけられてた。

「おい……、大丈夫か」

クロスは手を貸そうと伸ばそうとしたが、彼はすでに立ち上がっていた。

周囲には赤い果実が転がっている。彼は急いでそれをかき集めていた。

クロスは仕方なく、赤い果実を拾い渡す。

「ほらよ」

彼は顔を上げた。白い肌に赤と黒のオッドアイが印象的だった。まだ、幼い感じのする顔立ちだがクロスは自分と同じものを感じた。

「す、すまぬ……」

彼は軽く頭を下げるとクロスの手から果実を受け取り走り去った。

あれは、この辺では見ない。クロスは思う。

おそらく、南の国なのだろう。服装の柄の感じからしてそうだ。

そして、彼は自分より強いものを信じず、屈しない瞳をしていた。

「それにも……」

クロスはひとり呟く。もちろん、誰にも聞こえてはいない。

「あれは、なんだつたんだ?」

赤い果実の果汁がクロスの手に嫌な甘だるい匂いだけを残していく

た。

## 第十話（前書き）

この前の逃走中も面白かったですね……って、関係無いんですけど。そのうち、オリキャラ等々を混ぜて書きたいなあ、とは思っていますが。

「ほりょ」

ショーラの部屋に入り、クロスは買つてきたそれを軽く投げた。

「ふえ！？」

いきなり投げられたので、ショーラは受け取れずに床に落とす。

「あ、ごめん……」

ショーラは急いで拾い上げ、袋を開ける。

そして、嬉しそうに微笑み、袋の中の一つを口に入れだ。

「美味しい……ありがと、クロ」

「つて、俺は買つてきただけだけどな」

しかし、ショーラは首を横に振る。

「クロが美味しい、つて思えるものを食べられるのが嬉しいの」  
クロスはドキリ、とする。

ショーラの食べているそれが何なのかすら分からない。

「あ、ああ……そつか」

そう言つた瞬間、右手に鋭い痛みが走つた。

苦痛にクロスは一瞬顔をゆがませる。

「どうしたの？」

心配そうにショーラがクロスの顔を見つめる。

「何がだ？」

ショーラに心配かけるわけにはいかない。クロスはそれだけだった。

クロスにそう言われたショーラは、何も言えない。

何が、と聞かれたら、あれは見間違いだつたのだと思つしかない。

「じゃ、俺はもう部屋に戻るぞ」

「うん、ありがと」

ショーラは笑いながら、言いお菓子を食べた。

「 つ……」

クロスはシーラの部屋を出て、壁に左手をつきなんとか体を支える。

そして、自分の部屋に向かつて体を引きずるようになり始めた。右手だけでなく痛みは広がって、右半身が熱を持っているようだつた。

「無様な姿ですね」

頭上から声がし、顔を上げるが目の前には誰もいない。確かに、あいつ……ウエガの声がしたはずなのだが……それすらも幻聴だというのか？

「こっちですよ」

さらに上から声がする。クロスは恐る恐る顔を上げた。すると、天井に穴が空いていて、そこからヴェガが顔をのぞかせていた。

「何をしているのです。クロス」

クロスは何でもないよう右手を隠す。

「なんでもねえ」

「見せなさい」

ヴェガはクロスの隣に降りて、右手首を掴む。そして、無理やり手を開いた。

クロスの右掌は赤くなつていて、特に中心部分が酷く膿んでいた。「一体これは何ですか」

「しらねえよ」

「では、来てください」

無理やりクロスは手を引かれ、廊下を進む。

そして、一つの部屋に入れられた。その部屋はシンプルな作りの書斎の様だ。

あるいは一つの窓に黒いデスク、それに大量の本だけだった。

「なんだよ、」「……」

「私の部屋です。いいからそこに座りなさい」

クロスはしぶしぶ座る。ヴェガはほんだなをガチャガチャあさる。折角、綺麗に整頓されていた棚がめちゃくちゃだ。

ヴェガは漁り、かき集めながら電話をかける。

「ああ、今すぐ来れるか……。頼む」

手短に話し、クロスの座る椅子の前に来て跪く。

無理やり、手を掴み掌に黒い液体を染み込ませた布を巻いていく。

「……っ！」

「いいから黙つている。何でそなつたのか分からぬから一応万能薬を塗つておいた」

ヴェガは手際よくクロスの右手に布を巻いていった。

「……手際、良いな」

「当たり前だ。私はお嬢様の保護者の様なものだ。いざというときこれぐらい出来なくてどうする」

ヴェガは顔も上げずに答えた。

なぜか、クロスにはそう言つヴェガの口調がさびしく聞こえた。

「なんか、お前つて……」

クロスは一度言葉を切つて反応を見るが、ヴェガは何も言わない。

「俺にだけ冷たいよな」

ヴェガはぴく、と肩を動かす。そして、顔を上げた。

どうやら、巻き終わつたらしい。ヴェガは立ち上がり、布と黒い液体の入つた瓶をデスクに置く。

「あ、ありがとな」

そうクロスが言いかけた。

その時、ヴェガの目つきが鋭く、冷たく獣の様だといふことに気が付いた。

そして、クロスは壁に押し付けられる。

「なつ！」

「貴方もお嬢様と同じように」

ヴェガは怪しく微笑みながら、優しく語りかける。

「それ以上に優しくしてあげましょうか？」

沈黙が続く。ヴェガはよく分からぬ瞳でクロスを見つめ続けた。  
「冗談ですよ、私も貴方に対しても乱雑にしそぎましたね」

まるで、シェーラに話す様なとげのない口調で言つ。

やはり、こいつは俺のことが嫌いなんだな。クロスはヴェガの顔を黙つて見つめた。

「なんですか？　ああ……分かりましたよ。貴方に対しても今まで以上には優しくします」

ヴェガは半分諦めた様な口調で言つた。

そうしていると、いきなりドアが開き一人の小柄な少女が中に入ってきた。

## 第十話（後書き）

一応この作品は、男女の純愛をテーマとしています。  
ショーラとクロス

たぶん。

## 第十一話

「……邪魔だつた？」

クロスが壁に追い詰められていた姿を見て彼女はそう言った。

「いいえ。それより待つてましたよ、ウイル」

「つたく……いきなり呼ぶから姫に何かあつたのかと思つたじやん  
少女　ウイル、は大きなカバンを引きずるようになしながら中に入ってきた。

そして、ヴェガを押しのけて、クロスの手を掴む。

そして、巻いたばかりの布を解いていく。

「ああ、これは……」

「知つているのです？ウイル？」

ウイルは頷く。

「南の方で栽培されてる薬物の一一種だよ。まず北では見ないね」

「それは……何に使うんです……？」

クロスは恐る恐る尋ねる。

「戦争の道具を作るんだよ」

ウイルは淡々と言つ。

「触れれば、その身を焼きつくし。取り込めば、痛みと苦しみを忘  
れてしまう」

クロスは彼、のことが気にかかつた。

彼は、あの果実について知つているはずだ。

だが、彼はあれを素手で触つていた。

「そして、無限の命を手に入れる代物、つて数十年前は言われてた  
けど、

結局は不老不死なんてありえないのよ

「随分詳しいのですね……」

「当たり前でしょー、あたしは医者だよー？」

ウイルはつこり微笑む。

そうしている間にも、クロスの治療は続けられる。

「つて、言えたらよかつたんだけどね」「え？」

「随分簡単に言つてしまふんですね、ウイル  
ヴェガは溜め息交じりに呟く。

「ま、良いじゃん」

「あの、何の事だか……」

ウイルはにつこり、微笑む。

「あたし、食べたもん。ま、不老不死?」「……」「……」

信じられない。

不老不死、なんて魔法があつたとしても叶わない。

「あ、信じてないでしょ？ 証拠、見せたげる！」

そう言つと、右目をこする。

すると、色のついた薄い硝子の様なものが取れた。  
左目は透き通るような青。そして、右目は

「赤い……」

「そ、右目がみーんな赤くなるの」

「まさかっ……」「……」

街であつたあの少年。

「どうかしたの？」

「俺、街であつた。多分、不老不死

「……」

ウイルの表情がわずかに変わった。

口調は鋭い。

「え、ああ……」「……」

特別あの少年に思い入れがあるわけではないが、何か悪い予感が

して口を閉ざす。

「じゃ、そこに連れてきなさい」

そうして、クロスはウィルに手を引かれ連れ出された。

「ヴェガ、あんたもだよっ！」

「はあ……」

ヴェガも仕方なく一人の後を追つた。

## 第十一話

「で、ほんとーここなの？」

ウイルはクロスに静かに問いかける。

クロスは無言で頷く。

「ふーん……」

ウイルは座り込み、道を調べ始めた。

「あの……何してるんですか？」

「ねえ、クロス。あたしのこと怖い？」

クロスの問いかけに答えず、ウイルが聞く。

一瞬、何を聞かれているのか分からなかつた。

「何故…………ですか？」

「んー、だつて、クロスさ、あたしには敬語じやん」

そう言いながらもウイルは何かを探しているようだつた。

クロスは驚いた。自分が無意識のうちに敬語を使っていたことに。

「あの、怖いとかじやなくて……年上は敬つた方がいいのかと……」

クロスは言葉に詰まりながらも言いきつた。

ヴェガはそれを聞いて、少し複雑な気持ちになつていたのだが、誰も気に留めなかつた。

「あー、そんなのいいよ。見た目は一〇才位の可愛い少女なんだしだすが……長く、生きてるのでは……？」

「そんなことはない」

ヴェガが口をはさんだ。

「せいぜい、人生は30年ちよつとだ」

「えー、そーカナ？　あんた、いくつになつたのよ？」

ウイルが膨れてヴェガに聞く。

「私はもう、28ですよ」

「えー、そんなになつたの？　あんたは昔からほんと、変わんないわねー」

まるで、不老不死みたい。

「じゃ、あたしは33才かー」

「ウィルは遠い昔を懐かしむように咳いた。

「ウィルとヴェガってそんな昔からの付き合いのなのか？」

クロスが聞くとウィルはくすくす笑いだす。

「そーよ。ま、28年の付き合いになるわね」

「違いますよ、10才前後は会つてませんから、26年ぐらいでしょ? ウィル」

ヴェガがそう言つと、ウィルは立ち上がり、ヴェガのすねに回し蹴り。

「もー、仕事時間じゃないのよ、ヴェガ」

「そうだったんですか……」

ヴェガは足をさすりながら咳く。

「さあ! 謝りなさいつ! 昔、教えてあげたでしょ! ?」

「ウィルのキャラ崩壊が凄まじいな、と思いながらクロスは黙つて見ていく。

手や口を出したら、じつちまで被害がありそうだ。

ヴェガは小さくため息をつき、ウィルの目線に合わせる。

「すみませんでした……」

「ウィルはむつ、とする。

「続きは? ちゃんと最後までしないとねえ……」

「ウィルはなんだか楽しそうだ。

ヴェガの表情はだんだんしぶくなる。

「すみませんでした、姉さん」

「よーし、よくできたねえ、ヴェガー」

「ウィルはヴェガの頭をよしよし、となってる。

「ね、クロス。分かつたでしょ?」

「……兄弟だったんだ……」

その割には随分似てないな、と思つ。まるで、光と影の様だ。

「そー、これからもヴェガをよろしくね」  
ウイルはそう言つと、一瞬だけ笑う。  
次の瞬間、金属音が響いた。

「やつと現れたのね」

ウイルの手にはナイフが3本握られていた。

そして、いつの間にかあの少年が田の前に立つている。

「ああ。お主の名は？」

「あたしは、ウイルフィリア＝ヴェット。あんたは？」

「拙者の名は、リョウ＝サザナギ。反逆者、ウイルフィリア。拙者が成敗いたす！」

リョウ、と名乗った少年は南の方で使われている、刀、という武器を振る。

見た目はウイルよりも上だが、おそらくウイルの方が生きているのだろう。

「まさか、まだボスがあたしのこと探してたとはね…………」「あたり前であろう。お主の能力は珍しく、強力だ。野放しになつてゐるぐらいなら、

消してしまつた方が己の身の安全だら」

「へー。じゃ、ボスはまだ、あたしのことも戻したいんだ」  
ウイルはなんだか楽しそうだ。

それに対し、リョウはウイルに追いつき、刀を振るうのに精一杯の様だ。

「で、リョウは何の能力なの？」

その瞬間、ウイルの身体は地面に張り付いた。

「重力操作？ それとも、過重力？」

少しもあわてること無く、ウイルは聞く。  
リョウは黙つてウイルに近づく。

「えー、教えてくんないの？」

「 ウィルはそう言つと立ち上がつた。

「 な、何故……」

「 教えないよ」

ウィルはそう言つと、リョウにナイフを突き刺した。

## 第十一話（後書き）

この小説の的方向性を見失いつつある……。

## 第十三話（前書き）

久しぶりです m(ーー) m  
キャラがぶれてないか心配……

「分かるー？ あたしが危険、だつていう理由  
ウィルはナイフを抜く。リョウはその場に崩れた。  
「ま、あんた向いてないし、良いんじゃないかな」  
リョウは顔を上げる。クロスはあ、と声を洩らす。  
「目が……」

リョウの右目が黒くなっていた。

赤い目は不老不死、実を食べた証とウィルが言っていた。  
「じゃ、かえろつか？ 姫が探してるかもよ」

「クロ、ヴェガ、どこに行つてたの？」

ドアを開けた瞬間にシェーラがそう言つ。

「そりや、急に出ていくからー」

リリーもシェーラの後ろで不満げだ。

「姫、ごめんね？ あたしが二人を連れてつたんだー」

「ウィル……久しぶりっ」

シェーラはウィルに抱きつぐ、といつてもウィルの方がわずかに

小さいので、

ウィル抱きしめられている形だが。

「あ、そうだ。ウィルも折角来たから私が何か作ろうつか？」

シェーラはぽん、と手を打つ。

そして、キッチンの方へかけていく。

はすだつた。

ショーラはその場に崩れ落ちる。

「ショーラっ！？」

クロスが近寄ろうとすると、ウエガに止められる。ウイルが何かを言つている様な気がするが聞こえない。そして、ショーラはすぐに運ばれていく。

「あいつ、あんなに悪いのか……？」

クロスはぼつり、と呟くようになふねる。

「ええ……」

ウエガは答える。

「あと一年、生きられればいい方だと」

「あいつは……知ってるのか？」

クロスが再び尋ねる。ウエガは無言で頷いた。

「だから、貴方に会いたい、と。それと、いつもまでは言わないで、とも」

クロスは唇を強く噛む。

無知で、無力な自分が悔しくて。

ショーラは1週間、生死の境をさまよったが奇跡的に回復した。ウィルの看病のおかげ、ということになつていて。

それから、クロスは何事もなかつたよつてふるまつた。

ショーラがそうしていたから、だ。

彼女の望むことは全て叶えたい。  
出来ることならともにいきたい。

毎日が過ぎていく。

彼女の時間が消えていく。

そう、あれからもう1年がたと/or>していた。

ショーラの16回目の誕生日が、命の終わりが迫る。

## 第十二話（後書き）

次回からこよいよ本編です（え

## 第十四話（前書き）

お久しぶりです。

なんか、今回はじめやくちや分かりにくいつ、的な話です。こ

## 第十四話

「だけどね

16才の誕生日を迎えたショーラはわずかな命の灯を守っていた。

「私、次の雪が見れないなら見てみたいものがあるんだ」  
ショーラは窓から目をそらす。

「ねえ、クロ。私と一緒に南に行こう?」

クロスははつとする。

「まさか……『赤い実』を食べるのか?」  
あれだけウイルに止められているのに。  
食べても苦しみながら生きるだけ、と。

ショーラは首を横に振る。

「違うの、ただ私遠くに行つたことが無いから、行つてみたいな、  
つて」

ほんのささやかな願いなのかもしれない。

ただ、クロスはショーラには幸せにできるだけ長く生きてほしい。

「ああ、分かった」

二つの願いは叶わない。

「行こう、二人で」

クロスはショーラの手をとる。

なんて、この世界は残酷なんだわ、と思しながら。

「ふふ、外に出るなんて、いつぶりかな?」

ショーラはそう呟きながら一階の窓から外に出る。クロスはショーラをしつかりと抱きしめた。

まだ、ここにいる……よな。

クロスはしつかりとショーラの存在を確かめる。共に……いきたい。それさえも叶えられない。

「クロ、早くしないと誰かに見つかるよ……」「あ、ああ。そうだな……」

これは、決して生きるためにではない。  
むしろ、彼女の時間を奪う旅だ。  
彼女も……それを知っている。  
それでも、願いを叶えるために旅立つ。

俺は……止められなかつた。  
このまま長く生きるより、一瞬の時を笑つていてほしい……なん  
て。

俺は、人殺しだ。

「クロー？」

心配そうにショーラが顔を覗き込む。  
「何でもない。行くか」「  
ショーラは嬉しそうに頷く。

今、一つの道を選んだ。  
もう、戻ることはないのだろう。

クロスとショーラは屋敷を出た。

静かに白い雪が降り続き、彼らの足跡はやがて消えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8891s/>

---

雪時計

2011年11月20日03時18分発行